

厚保の榑崎頼三と「白虎隊」

幕末の戊辰戦争で旧幕府勢力の中心と見なされ、新政府軍の仇敵となった会津藩。そこで組織された、15歳から17歳の少年たちの部隊が白虎隊です。本来は城下防衛のためにつくられた隊ですが、戦況の悪化に伴い、彼らは前線へと出動させられました。

しかしながら、旧式の武器しか持たない彼らは各所で苦戦を強いられ、中でも「二番隊」は決定的打撃を受け、負傷者を抱えながら郊外の飯盛山へと落ち延びました。そこから見た町中の火災の様子を会津若松城の落城と思いこみ、総勢20名が自刃。一命を取り留めた飯沼貞吉を除く19名が死亡したというのはドラマにもなった有名な話ですね。

さて、ここで「榑崎頼三」という人物についてふれておきましょう。榑崎頼三は、1845年に萩藩士の家に生まれた長州藩士です。彼は、明倫館に学び、長州武士として成長していきました。その後、長門国美祢厚保の榑崎家（毛利家中級の武家）の養子となり、18歳のときに下関に出て、四国連合艦隊との攘夷戦に参加しています。さらに1865年に勃発した戊辰戦争では、中隊指令となり進軍。激戦となった会津若松城攻略戦に参戦しました。

榑崎頼三と飯沼貞吉がいつ出会ったかの記録は定かではありませんが、頼三が厚保に戻ってきた時に、彼の乗る馬のくつわを取っていた少年が飯沼貞吉であったそうです。頼三の帰郷に村人たちが総出で開いた祝いの席で、酒に酔った村人が「生き残ってよかったなあ」と言うと、貞吉が飛び出して自刃しようとしたので、頼三が「過ぎ去ったことは全て忘れ、しっかり勉強し、ひとかどの職についたらふるさとの方々にも対面するとよい」と言い聞かせたという話も厚保に残っています。

頼三は、自分の屋敷で飯沼貞吉をしばらく養育し、傷の再治療をしたり、学問の修行をさせたりしたようです。

その後、飯沼貞吉は勉学に励み、下関で電信技士として働いた後、小倉・山口・神戸・大阪・熊本の電信局に勤務。こうした働きの中で、彼は工務省電信建築技師の重鎮として認められ、京城一ブサン間の通信架設責任者としても活躍しています。後に仙台・札幌郵便局の要職を経て、逓信省を退職。文字通り日本電信業界の先駆者として活躍し、1931年（昭和6年）に79歳でその生涯を終えています。

彼は飯盛山での出来事については晩年まで誰にも話さず、白虎隊の最期の様子が現在に伝わったのはそれからだそうです。ちなみに、貞吉は遺言により飯盛山に眠る同志の近くに埋葬されました。

さてさて、美祢から遠く離れたパリ。なんとここのモンパルナスの丘に、榑崎頼三の墓

はあります。彼は、その後、長州と会津の関係修復に尽力し、明治3年に兵部省派遣で大坂兵学寮からフランスに留学を命ぜられ、明治8年2月に29歳でパリで死亡したのです。そして、若くして没した頼三は、貞吉と再び会うことはなかったそうです。

榑崎頼三の旧宅跡は、東厚保の小杉集落の中にあります。佐藤内閣の時の高見文部大臣も生まれ育ったという頼三の屋敷。建物はもう残っていませんが、小杉集会所向かいの山道を登ると、立派な石垣と庭園のあとが残っています。なお、2005年の11月、美祢市教委により、榑崎頼三の屋敷跡を紹介する説明板が現地に建てられました。国民文化祭の県内開催を機に、百数十年來のわだかまりが残る長州と会津の友好につながれば、と設置されたものだそうです。



(榑崎頼三の屋敷跡)

【参考にした文献等】

「会津残照」 田村 幸志郎 著 2005年

※ 田村 幸志郎氏は、長野県出身でグリーンパーク創設者。「会津残照」は氏の自費出版による著書です。

「戊辰怨念の深層」 畑 敬之助 著 歴史春秋社刊 2002年

山口新聞 2006年11月16日の記事

東厚保小杉の榑崎家屋敷跡の説明板

(文責：辻本)